



## 年間第 27 主日 (マルコ 10:2-16)

わたしのところに来させなさい

年間第 27 主日、「聖書と典礼」では福音朗読の後半になる「子供を祝福する」この場面は一段下げて印刷しています。司式司祭の中には朗読を省略することもあるでしょう。その場合おそらく、説教でも触れないのだと思います。中田神父は今回、この「少数派になるであろう」箇所を取り上げたいと思います。

県道脇の三角コーンと柵を取り外しました。早速観光客が来て、正面玄関で撮影会です。「ほらほら、集まって」「見て見て。献堂百周年だって」「なかは入れないんだって」その声を聞きながら、説教を考えたり、けいこの準備をしたりする日々が再開します。久しく観光客の声を聞かなかったので、大声で話していないとは思いますが気になります。

今から 40 年前、のちに列聖されたヨハネ・パウロ二世が長崎にやって来ました。公式のスケジュールの合間を縫って、聖マキシミアノ・マリア・コルベ司祭ゆかりの聖母の騎士修道院を訪問したり、純心聖母会が運営している三ツ山の原爆ホームを訪ねたりしました。聖母の騎士を訪問された時、一組の若い夫婦が教皇様の目に留まりました。お母さんの腕には幼子が抱かれていました。

記憶に新しい教皇フランシスコの長崎訪問の折、野外ミサで教皇様が会場内を専用車で回る時、何度か車を止めさせました。そこには幼子を抱いた家族がいて、教皇様が幼子に目を留め、抱き上げてくださったのでした。教皇様が真っ先に目に留めるその先には、幼い子供がいました。

教皇フランシスコも、聖ヨハネ・パウロ二世教皇も、イエス様の姿を模範に生きておられます。一国の元首ですから、警備は相当厳しいでしょう。それはまるで、イエス様の周りを取り囲む弟子たちのようです。群衆が押し寄せて、何かが起こっては大変だという気持ちは理解できます。

ところがイエスは無防備な子供をありのまま受け入れてくださいました。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。」(10・14) しかも子供たちを連れてきた人々を叱った弟子たちに対し、「イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた」(同上)とあるのです。

「憤った」とありますが、「子供を祝福する」場面はマタイ福音書とルカ福音書にもあります。ただマルコのような「イエスはこれを見て憤り」という記述は見られません。「イエスが憤られる場面は考えにくい」と思って削除したのか、ひょっとするとマタイは人々を叱った側にいたために、ばつが悪くて削除したのかも知れません。

イエスはこれ以前にご自分の死と復活について二度予告をしています。弟子たちには理解できませんでした。その直後には「弟子たちの中

でだれがいちばん偉いだろうか」と議論していました。自分たちが師と仰ぐイエスがどんな人なのか、どのようについて行けば良いのか、理解が足りませんでした。

この弟子たちの理解不足が、子供たちへの接し方で頂点に達したのです。「あなたがたは何も分かっていない。」残念な気持ちが爆発して、イエスが憤られたという表現になったのでしょうか。理解不足が伝わる態度を見せられ、ストレスが積もり積もって雷が落ちる。私もいたく共感します。

「神の国はこのような者たちのものである。」(10・14) イエスは単に目の前の子供だけを指して言ったわけではないはずです。「このような者たち」、イエスのそばに置いてもらうことを素直に喜ぶ人たち。イエスの言葉一つ、しぐさ一つでも喜んで受け入れる人たち。このような者たちの居場所を妨げる行動は、イエスの思いを妨げる行動になってしまいます。十分気をつけなければなりません。

「子供たちをわたしのところに來させなさい。妨げてはならない。」私たち一人ひとりにも、イエスのこの言葉は向けられていると思います。イエスのもとにどんな人でも置いてもらえる環境を、私たちは真剣に考えなければなりません。

「あなたは足手まといになる。イエスから遠く離れてください」と、言葉や態度で誰かに接していないだろうか。「すべての人のいのちを守る」この目標にも関わってきます。振り返りの一週間といたしましょう。